

ラスコーリニコフの自然観をめぐつて

—感情と身体の働きを中心にして—

高橋 誠一郎

はじめに

本論における私達の意図は、感情と感覚の働きに注意を払いながら、ラスコーリニコフの自然観の特徴を明らかにし、彼の自然観の変化をたどることである。私達はこの作業を通して長編小説『罪と罰』が持つ自然の構造の骨格を知り、ドストエフスキイ自身の自然観にも迫ることができるであろう。

『罪と罰』における感覚が果す役割の重要性についてはすでに、

桶谷秀昭氏の鋭い指摘があるが（『ドストエフスキイ』河出書房新社、昭和五三年）、氏以降も感覚や感情の側からのすぐれた考察があり、それらはドストエフスキイ研究に新たな視野を開いているように思える。以下、本論に入る前にそれらの考察を概観し、いくつかの問題点を整理しながら、この小論の方向性を定めたい。

さて桶谷氏は、重要な場面でしばしば『ощущение』（感触）

という言葉が用いられることに注意をうながして「観念はつなに感覚、ほとんど生理にひとしい、いいようのない『感触』《ощущение》となつて彼（ラスコーリニコフ——筆者）をつかむ」と

指摘している（一一五頁——一五）。

そして流刑地においてもラスコーリニコフが自分の犯行を後悔しなかつたことを確認しつつ、彼が病院の窓からソーニャの姿をはるか遠くに見出した時、「何かがラスコーリニコフの心臓をぐさりと刺したような気がした」（五五）という文章を引いて、感触の面からラスコーリニコフの変化の根拠を示している。

このような氏の視点を清水孝純氏も受けつき（『ドストエフスキイ・ノート』、『罪と罰』の世界、九州大学出版会、一九八一年）、この作品では『感覚』（あるいは『感触』）が極めて重要な役割を果してゐる（一三九）と述べている。そして「夢は感触によって彼の意識の薄明の空間に入ります……中略……夢とは、この生命の暗部から発するサインなのです」（一一〇五）と述べて、ラスコーリニコフはエピローグにおいて「自己の中に大地的なもの」を見出すに到る（一九九）と書いている。

さらに氏は、桶谷氏が「独創的ではない」としてあまり扱わなかつた「ラスコーリニコフの観念」の特徴について、「ラスコーリニコフのカズイスチック（心是非論）は剃刀のごとくときす

まさって、もはや自分自身の内部に意識的な駁論を見いだすこと
ができなかつた」というドストエフスキイの記述を引いて、カズ
イスチカとは「倫理の一般的格律が、個々の場合にどう適用され
るか」を論じる「道徳神学の一部門」であることを紹介し、この
文章は「ラスコーリニコフの認識が、その内發的論理のみによつ
てうち建てられてゐるのではなく、恐らくヨーロッパの長い伝統
…中略…によつて鍛えられた論理で構築されたものである」と
を示してゐるだらうと述べてゐる（一二八～一二九）。

そして「ラスコーリニコフの思想」との関連では「自分は自分
の力の所有人である」と記したマクス・シニティルナーの『唯一
者とその所有』が「特に重要」であると指摘してゐる。

このような氏の指摘はラスコーリニコフにおける論理と感覚と
の激しい対立を浮きぼりにしていると言えよう。ただ氏の視野に
感情論や身体論がほとんど入つてこないために、ラスコーリニコ
フが自分の感情や感覚をどのようにとらえていたかが明らかにさ
れていない。私達は西欧思想の流れの中で、感情や感覚がどのよ
うに理解されていたのか振り返りながら感情や感覚に対するラ
スコーリニコフの考へを明確にする必要があるだらう。

この意味で私達の興味を引くのは、ラスコーリニコフにおける
感覚や感情の働きに注意を払いながら、それらとドストエフスキ
ーの自然観との間に密接なつながりのあることを指摘した中村健
之介氏の著作（『ドストエフスキイ・生と死の感覚』、岩波書店、
一九八四年）である。氏は人工的な都市ペテルブルクにおいてラ

スコーリニコフが「自然とのふれあい」を拒絶されてゐたことに
注意をうながしながら、「一切が、彼の犯行までが…中略…ご
初めの感情の開化にあつては…中略…まるで自分の身に起つた
のではないかのように思われた」という文章を引用し、悔恨のな
いラスコーリニコフの甦生は「世界感の一変」であり「生ける自
然への帰還」なのであると主張する（三～五九）。

さるだ氏は「自然讚美」がドストエフスキイの多くの作品に見
られることを指摘し、また『作家の日記』においては、「自然と
のふれあい」が「人類の究極の目標」であると記されていること
に注意をうながし、シリング、シラー、サンドなどの思想に見
られる「汎神論的自然観」がドストエフスキイの考え方方に強い影
響を与えてゐると述べている（九三～一二〇）。

ただ氏がドストエフスキイの特異な「自然感」を強張し、ラス
コーリニコフの「自然観」の変化をも主にドストエフスキイの
「人並み外れて鋭敏な『感じる』体質」（九）（傍点筆者）によつ
て説明する時、私達は立ち止まざるを得ない。

ラスコーリニコフの自然観の変化は、やはり作品の筋に従いな
がら、彼の論理の特徴を分析し、彼の感情や感覚の働きを丹念に
観察することによって明らかにする必要があるだらう。そしてこ
のような作業の中で、ドストエフスキイの自然観とその特徴も浮
び上つてくる筈である。

ところでシリングに強い影響を与えたスピノザはその主著
『エチイカ』において、近代西欧哲学の基礎を築いたデカルトの

思想を批判的に考察し、デカルトとは異なる感情論や身体論の地平を切り開いている。²⁾

本論において私達は、デカルトやスピノザの考察を参考にしながら、まず第一節においてラスコーリニコフの自然観とその特徴を明らかにし、第二節では彼の見た二つの夢をめぐって感情や身體の働きを具体的に分析し、そして最後の第三節では彼とソニーの出会いを中心にラスコーリニコフの自然観の変化について考へてみたい。

一、自然の修正

(1)

ラスコーリニコフの自然観の一側面を端的に語っていると思われるは、彼を犯行へと押し進める役割を果した大学生の次のような言葉であろう。

すなわち、大学生は話し相手の若い将校にまず高利貸しの老婆の非道さを詳しく語った後で、今にも死にそうな老婆の生命と貧しさのためにあたら才能を埋もせていく多くの若者達の生命と比較して、有害で余生の少ない老婆を殺して金を奪い、その金を社会に役立つれば多くの生命が救われる、「一つの死と引換えに百の生——これは算術じゃないか」と語る。そして賛成をしぶる相手に対しても「人間は自然を修正」（傍点筆者）しているではないかと述べているのである（II・五四）。

このような大学生の言葉は偶然彼らの隣に座り彼らの会話を聞くラスコーリニコフの自然観をめぐって

いたラスコーリニコフに激しい衝撃を与えるが、それは何よりも大学生の言葉がラスコーリニコフの考え方と一致していたためであり、ラスコーリニコフはこの時、自分の内に芽ばえていた考えが、彼のひとりよがりなものではなく、他者の同意も得られるような妥当性をもち得ていてそれを確認したのであった。

ところで私達は大学生の言葉からいくつかの思想的特徴を取り出すことができる。すなわち、第一には彼が生命をも数量的比較の対象にできると見なしていること、第二には、人間が自然よりもすぐれていると考えていることである。だがなにゆえに彼は人間が自然を修正できると考えたのだろうか。

この意味で私達の興味を引くのは、近代科学の急速な発展の基礎となつた『方法序説』において「われわれ自身を、いわば自然の主人かつ所有者たらしめる」（H・二一〇）べきだと述べたデカルトの考え方である。以下、少し彼の言葉に耳を傾けたい。

デカルトはその著『方法序説』理性をよく導き、もちろんの学問において真理を求めるための方法についての序説において、方法の問題を考えながら、「真理を探求したすべての人々のうちで」数学者のみが「いくつかの確實で明証的な推理を見いだした」ことに注目し、数学的方法つまり「対象において見いだされるさまざまな関係すなわち比例のみを考察」することによって、実際に「私の精神がその対象をいよいよ明晰に考へる習慣を得て少しづつ獲得」したと記し、その方法は「他の学問の問題にも用いうる」と考えた（H・一七八一七九）。

彼はまた別の箇所で人間と他の動物を比較しながら、身体的な諸機能は動物も「われわれと等しくもつていて」が、「考へるはたらき」は人間のみがもつ機能であることを強調している（H・一九九）。

これらの表現に見いだされるのは人間の知性に対する信頼であろう。そしてこのような知性の重視は、「私は考へる、ゆえに私はある」（H・一八九）といふが見いだした哲学の第一原理においては、ほとんど知性の身体に対する絶対的な優越性にまで高められていると言つても過言ではあるまい。

このことは彼が感情と知性との関係について述べた『情念論』においても明確に述べられている。すなわちデカルトは「われわれの情念（受動）もまた、われわれの意志の活動（能動）によつて直接にひき起したり、取り去つたりできない」（J・四三六）と情念の自立性を認めつつも、しかし、「最も弱い精神をもつ人々でも、精神を訓練し導こうとして十分なくふうを用いるならば、みずから情念に対しても、ほとんど絶対的な支配を獲得できるであろう」（J・四四一）（傍点筆者）と記しているのである。

こうして私達はデカルトの考察を参考にするとき、始めて大学生の言葉を論理的に理解することができる。つまり、人間が知性を持つ生物であることに注目して人間の知性を高く評価し、知性の感情や身体に対する絶対的な優越性を認めるところによつて、人間は自然の一部でありながら、同時に自然を修正しうる高い位置に立てるるのである。

もちろんデカルトは人間が他の人間を殺すことができるとは一言も語つておらず、またそのような言葉を予想すらしなかつたであろう。デカルトの思想と大学生の言葉との間に類似性を求めるのは酷であるかもしれない。

だがデカルトは一方で、哲学の第一原理を見いだしたと記しながら、他方では「道徳」、人間の行動の問題については「漸定的な括弧⁽³⁾をむしろ積極的に推奨」していたのである。すなわちデカルトは哲学の建て直し、つまり「自分の家の建て直し」をする間も「不自由なく住める」仮りの家を「道徳」のために用意しており（H・一八〇）、そのため人間の行動に関するては彼の方法に対する反省が及んでいないのである。

比喩的に言えば次のようになるだろう。確かにデカルトの方法に従つて新しい家は立派に再建された。だがデカルトは家の住民達の行動については何も新しいことを語らなかつた。新しい住民達がデカルトの方法に従つて人間の行動の問題をも解決しようとした時、犯罪が発生したと。

(2)

ところで大学生は自分の理論を語りはしたが、しかし相手の若い将校に「君は今しゃべりいろいろと御託を並べているが、自分で婆アを殺すのかどうか、俺に言つて見ろよ」と問いつめられると「もちろん、否だ。俺はただ正義のために……俺には関係ない事だ」と答えていたのである（II・五四）。

それは仮りに彼の理論が論理的には正しいとしても、彼の行為

は犯罪として処罰されることを、大学生が自明のこととして知っていたからだと見えよう。

だがラスコーリニコフはこの時、彼自身の第一の理論を実行に移せるような「言葉を換えれば彼の犯罪が犯罪ではなくなるよう」なもう一つの、或る意味ではより独創的な第二の理論を創出していた。そしてその第二の理論から、老婆の殺害をためらう大学生を、知性的により劣ったものとして、見下せるような立場に立てていたのである。

それは「人間は自然の法則によって、おおよそ二つの種類に分けられる」(II・二〇〇)という理論であり、デカルトによれば、人間は知性を有するゆえに他の自然から分けられ、「自然の主人」となれるが、ラスコーリニコフの理論ではさらに人間自身も「新しい言葉を発する天分」(傍点筆者)を有するか否かで、現在の法に従って生きる「凡人」と現在の法を犯し「未来の主人」となる「非凡人」とに分けられるのである(II・二〇〇)。

そしてラスコーリニコフは非凡人の例として、パリで大量殺人を行い、モスクワでは五十万もの兵士を見殺しにして逃げ去ったナポレオンをあげ、彼が犯したそうした大量のおびただしい流血にもかかわらず、現実の変革者であるという点において、大衆は彼を犯罪者としてではなく英雄としてとらえ、彼の行為をほめたたえていることを指摘して、このような非凡人には単に殺人が許されるばかりでなく、現実を変革するためにはむしろ現在の法を

踏み越えるべきだと彼は考えるのである(II・一一一)。

ところで私達はラスコーリニコフがこのような自分の理論を「自然の法則」という形で正当化していることに注目したい。ラスコーリニコフの敵対者ルージンは自分の利己主義を「科学」の名において正当化したが(II・一一六)、ラスコーリニコフ自身も自分の理論を、物理や化学の分野における新しい法則の発見と同次元の科学的な新しい自然法則の発見とみなしていたと言えるだろう。

そして他方、ラスコーリニコフは小説の冒頭で、人間は「新しい一步、新しい自分自身の言葉」(II・六)をもつとも恐れないと語っているが、「新しい言葉」非凡人の理論は、自ら自分が非凡人であると信じつつも貧しさのために自分の才能を確かめることのできなかつたラスコーリニコフに、「自分がナポレオンか否か」を彼自身の感情の反発にもかかわらず、犯罪という手段をとつてでも検証することを要請したと言えるだろう(II・三二九)。

そしてこのようなラスコーリニコフの決意は完全犯罪に対する彼の考察——一般的の犯罪は凡人たちの気の弱さのためにいたる所で証拠を残し暴露されてしまうが、非凡人によって究極的な善のためになされる場合は、犯罪はすでに犯罪ではなくなり、罪に対する恐れがないので犯行は十分な理性と意志をもって冷静に遂行されるのでいかなる証拠も残さない——によって助長されることになる(II・五八~五九)。

こうしてラスコーリニコフの二つの自然観から派生した二つの

理論は、互いに補完しあいながら、ラスコーリニコフを犯行へと駆りたてる結果になつたと言える。

すなわち、一方では高利貸しの老婆は、自然の修正のために殺されねばならず、他方、自然の法則によつて非凡人の側に位置すると考えたラスコーリニコフは、現在の法に反する犯罪を犯してでも改革者としての第一歩を踏み出さねばならなかつた。

一、自然の法則

(1)

だがドストエフスキイは『罪と罰』の創作ノートに「それとも私達の内部で叫んでいる私達の知らない自然の法則があるのだろうか」（傍点筆者）と書いてゐるが、自分の見出した「自然の法則」にうながされて犯行に踏み切ろうとするラスコーリニコフは、彼の「内部で叫んでいる」彼の「知らない自然の法則」によつて悩まされることになる。

ただ私達は、この時ラスコーリニコフが理性の面においては、自分の犯行に対しても一点の疑いも抱いていないことに注意を払いたい。彼の理性はむしろ犯行を積極的に推し進めており、彼は犯行後も自首を決意した時ですら、論理的には彼の行為が間違つていたとは認めていないのである。

では何が彼を不安へと駆りたてているのだろうか。

スピノザはその著『エティカ』において、「情念論」にふれながら「精神が感情にたいしても絶対的な支配権を所有しう」と記したデカルトは、自分の「想像力のなみはずれた鋭さをあらわしたにすぎない」と批判し（E・一八四）、「感情の力は、感情以外の人間の活動、あるいは、能力を凌駕することができる。それほどに感情は頑強に人間に粘着している」（E・二七三）と述べている。

この点に注意を払う時、私達はラスコーリニコフが犯行の下見を終えたあとで、自らの行為に対する「嫌悪感」から犯行を一時

という疑いから生ずる一種の『悲しみ』である」（J・五〇一）。彼のこの言葉はラスコーリニコフの不安を的確に説明しえているようを見える。

すなわち、ラスコーリニコフは有害な高利貸しの老婆を殺して金を奪い、その金を用いて社会のために役立つことは「善い」ことであると思つてゐるが、それと同時に彼の内部でそれは「悪い」ことではないのかと反対するものがあり、それが彼を不安にさせているのである。

は思い止めようとしていたことを思い出す。この時、彼の「感情の力」は一時的にせよ、理性の能力を凌駕したと言え、またこの節の冒頭で見たラスコーリニコフの「不安」は、そのような「感情の力」が絶え間なく理性の決定に反抗していたことの一つの証左であるととらえることができるであろう。

そして、こうした感情や感覚の直接的な反発が失敗した後に、彼の感情的・感覚的な嫌悪感は「夢」という表現手段をへてラスコーリニコフに語りかけることになる。

(2)

たとえば犯行の前日に見た夢の中で、ラスコーリニコフは彼が子供の時に見た、やせ馬が馴者に殺される場面に再び立ち会っている。

夢を見終ったラスコーリニコフは汗をびっしょりかいて目がさめる。そして彼は老婆を殺す時に感じるであろう感触をはつきりと予感しながら、自分の計画が「算術のように正しい」としてもそんなことは決してできないと強く感じるのである(II・五〇)。

なぜならばドストエフスキイは夢について「病的な状態のもとでは、夢はしばしば並はずれた明瞭さと鮮明さ、そして現実との驚くべき類似性を持っている」(II・四五~四六)と書いているが、ここでも夢という次元ではあるが、彼がこれから成そうとしていることとのいくつかの著しい類似があったからである。

まず第一には、殺された馬は馴者にとって役に立たないもので

あり、老婆の存在もラスコーリニコフにとっては無益なものであった。そして第二に馴者は抵抗のできない馬を一方的にムチで、最後には鉄でこでなぐり殺したが、ラスコーリニコフが斧で殺そくとしていた老婆も肉体的にはやたりか弱い存在であった。最後に、ラスコーリニコフは老婆と一度会つただけの存在だったが、彼が見たやせ馬も以前とは彼と何ら関係もない偶然出会った存在であった。それにもかかわらず、幼いラスコーリニコフは馬がぶたれる度に、自分がなぐられたような鋭い痛みを自分の心に感じて激しく泣いたのだった。

もしラスコーリニコフが夢において表現された自分の感情や感覚の叫びを真に理解したなら、彼は犯行には踏み切らなかつたであろう。だが感覚はデカルトにおいては「われわれをときには欺く」(H・一八八)ものと定義され、彼の考え方を一層論理的に発展させたヘーゲルにおいては「感情とか感覚とかは…中略…最もつまらないもの、最も真実でないものである」と規定されるに至っている。

ラズベミービンはラスコーリニコフの性格について「彼は感情を表に出すことがきらいである」(II・一六五)と語っているが、このことはラスコーリニコフが感情を表現することは恥かしいことだと思い、またデカルトと同様に自分の感情を「絶対的に支配」できるものと考えていたことを物語っていると言えるだらう。夢を通して語られた感情や感覚の叫びは、ラスコーリニコフに對して一時的な影響力を持ちえただけで、彼の犯行を押し止める

には至らなかつた。

(3)

彼は唯一の目撃者を殺し、また証拠も残さずに犯行現場から逃走することに成功する。一見、彼の企てた完全犯罪はうまくいつたかに見えた。だが犯行を成功裏に終えたあとも、ラスコーリニコフは「不安」から逃れることはできない。否、それどころか以前よりもはるかに鋭く、そしてしばしば感情や感覚の痛みは彼を襲うのである。

犯行後に彼が見た「老婆の夢」は、そのような彼の苦腦をもつとも象徴的に語っているように思える(II・二一三)。

夢の中でラスコーリニコフは再び老婆の部屋にいる。老婆はい

すに腰かけて、からだを前に屈して頭を低くたれている。彼は彼女の脳天目がけて斧を打ちおろす。けれども老婆はびくともしない。彼が驚いて彼女の顔を見ようとすると、老婆もさらに頭を低くされた。彼が床に顔をこするようにして彼女の顔を見ると、老婆は彼に聞かれまいと必死に笑いをこらえながらも、静かに笑つてゐるのであった。ふと彼は寝室のドアがかすかに開いていて、そこでも人々がひそかに笑つてゐるような気がした。彼は力まかせに老婆の頭を打ち始める。だが斧の一撃ごとに、寝室の人々の笑い声は高くなり、老婆は全身をゆすぶつて笑い出した。恐しくなつて逃げ出そうとした彼は、ドアというドアが開け放たれいっぱいの人々が無言で彼を見つめているのに気がついた。——そこ

ところでこの夢の中で老婆やドアのうしろに隠れた人々の笑いが印象的であるが、これらの笑いは何を意味しているのだろうか。私達はまずラスコーリニコフが殺害の後に、ともすれば失せようとする注意力を必死になつてぶり起こしながら証拠の隠滅を計つていたことを思い出したい。

唯一の「目撃者」リザヴェータが殺された後にはもう誰もラスコーリニコフの犯行を知つてゐる者はいないかに思える。だが実際にには、ラスコーリニコフ自身の目は彼の犯罪をことごとく見つめていた。そして彼の腕や指は、斧が老婆の脳天に当つた時の手ざわりや彼女の体から流れ出た血の感触をはつきりと覚えているのである。

確かによく言われるよう、感情や感覚はうつろいやすく、一時的な性格を強く持つ。だがスピノザが指摘しているように、感情や感覚は通常私達が意識している以上に私達と結びついており、長い間私達の行動を左右しうる。そして、一見忘れ去つてしまつたかに思える感情や感覚ですらも、それらが激しい印象を伴つていた時には、ラスコーリニコフが見たやせ馬の夢のように長い時間の流れを飛び越えて、再び現在に現出するのである。

ラスコーリニコフが目撲者を完全に殺そらうとするなら、彼は殺害の実行者である自分の身体を消さねばならなくなるであろう。事実、彼は後に老婆を殺したことによつて「永久に自分を殺してしまつた」(II・三二二)とソーニャに語るが、殺された老婆の

で彼は目が覚める。

姿は彼の記憶に焼きつき、一方彼の身体はラスコーリニコフ自身に対する決定的な不和を示すようになる。彼は無意識の内に車道のまん中を歩いていてあやうく馬車にひかれそうになつたり（「八九」）、無力感からネヴァ川に飛びこもうとしたりするが（「一三一～二」）、これらの行為は、あらゆる目撃者を抹殺しようとした彼の意志のある意味で当然の帰結であると言えるであろう。このように見てくる時、夢の中での老婆やたくさんの人々の笑いは、目撃者をなくすうとする行為の無意味さをラスコーリニコフ自身が無意識的にせよ感じていたことを物語つていると考えられるだろう。

ところで私達はラスコーリニコフが単に夢の中で人々から笑われるだけでなく、自身も笑いの発作と言えるようなものに襲われていることに気をつけたい。たとえば、老婆の部屋を不意に訪れた客が彼女の不在に疑問を抱いてドアをゆさぶった時、ラスコーリニコフはいまにもはずれそうに上下に揺れるかんぬきを恐しげに見ていたが、ふいに「ベロリ」と舌を出して彼らをからかい、大声で笑いたくなつた」（「一二六」）のである。

ペトロフスキイはこのような笑いの発作が「警察署から召換状がとどいたときにもこの殺人者を襲い、ポルフィーリイとの会話の際」にも起きたことに注意をうながして、このような笑いは單にラスコーリニコフの「異状な神経を物語っている」だけではなく、「主人公が自分自身にも苦い嘲笑をあげて『自己処罰』を加えている」ものであると述べている。⁽⁸⁾この指摘は非常に鋭い。

ただ私達は、ラスコーリニコフがこのような「自己処罰」を意図しているのではないことに気をつけたい。そうではなく、笑いはむしろ彼の意志に反して、彼には「自分自身を制する力がないかのように」（「一二六」）身体の奥深くから涌き上つてくるのである。ラスコーリニコフは自分の全意志を集中して必死に笑いをこらえる。そしてようやく笑いをこらえたあとで、彼はあたかも全力疾走したあとのような激しい疲労感に襲われるのだ。

ドストエフスキイは『死の家の記録』や『未成年』において、笑いを見れば人間がわかると記したが、このことは彼が笑いを知性や感情や感覚と結びついた全人格的なものだととらえていたことを物語つ正在とと言えよう。

すなわち、本当の笑いは知性や感情や感覚などの喜びが一致したときにあらわれ、それに反して、それらの間にずれがあるとき、笑いはゆがんだものとなり、またおおいがたい亀裂があるときには笑いはすでに見たような発作となつて冷静をよそおう主人公を襲うのである。

こうしてラスコーリニコフは生きたいと願う彼の意志にもかかわらず、自分自身の感情、感覚や夢など彼の「内部で叫んでいる」「自然の法則」によって次第に追いつめられていく。

最後に私達はこのようなラスコーリニコフとソーニャとの出会いを中心にラスコーリニコフの自然観の変化を追つてみたい。

三、自然との出会い

(1)

私達はまず彼らの最初の出会いが、いわばソーニャの父マルメラードの流れ出る血を媒介として成り立っていたことに注目したい。すなわちラスコーリニコフは、酔払つて馬車にひかれたマルメラードを偶然見付け、率先して彼の家まで運んで来、そこでソーニャと出会つたのだつた。

ところで老婆を殺した際に、彼女の血が自分についたことに気付いたラスコーリニコフは、理性を失いかける程に激しく狼狽し、また犯行の現場を再び訪ずれた彼は、わざわざ見知らぬ職人たちに流された血の跡についてたずねた。流された老婆の血は、ラスコーリニコフの手や衣服に飛び散つたばかりでなく、彼の心の奥深くまでしみ込んだかのようである。

それは恐らく血がふだんは見えないにもかかわらず止ることなく人間の体の中を流れる川のようなものだからであろう。頭の中で殺人を抽象的に描いていたラスコーリニコフは、突然彼の前に拡がつていく荒々しい自然の流れに圧倒されたと言つても過言ではあるまい。

それに反して、馬車にひかれて血だらけになつたマルメラードを彼の部屋まで運んだラスコーリニコフは「血まみれ」になりながらも、あたかもマルメラードの血によつて彼についていた老婆やリザヴェータの血がすっかり洗い流されてしまつたかのよ

うに、かえつて生き生きとし「おれの命はあの老いぼれ婆アといつしょには死ななかつた」(II・一四七)と感したのであつた。それは老婆の血がラスコーリニコフと他者とのつながりを断ち、彼に「すべては彼がその上を歩いている石のように、うつろで死んでいた。彼にとつて、ただ彼一人だけにとつて死んでいるのだった」(II・一三五)と感じさせたのに對し、一方マルメラードの血はラスコーリニコフに彼がまだ他者を助けうることを證明し、彼と貧しき人々との間に再びつながりを見いださせたと言えるだろう。

つまりマルメラードの血は、ラスコーリニコフに彼の犯行の有無にかかわらず多くの人々が社会の犠牲となつて亡びていることを再確認させ、このような非人間的な社会は血を流しても改革せねばならないという彼の信念を一時的にせよ再び強めさせたのである。

そしてラスコーリニコフは、家族のために「燃えるような羽」をつけて街頭に立つ娼婦ソーニャの内に、他者のために犯行に踏み切つた自分と同じような反社会的な犯罪者の姿を見、孤独な自分とのつながりを見いだしていたと言えるだろう。

(2)

けれどもソーニャと何回か会ううちに、ラスコーリニコフは彼が期待したものとは全く違つた性質を彼女の内に見いだすようになる。

たとえばルーリンがソーニャを泥棒にしたてようとした事件の後で、ラスコーリニコフはソーニャに、ルーリンかそれとも彼女の義母カティリーナの「いざれが死ぬべきか」と尋ねる。それに対してソーニャは「誰が生きるべきで、誰が生きるべきでないか」などと裁くことが人間にできるのかと問い合わせ正すのである(II・三一)。

ここには自己の知性を重視し、自分の観点から老婆やルーリンの存在を抹殺すべきだと判断したラスコーリニコフとは正反対の考え方があると言えよう。スピノザは身体が知性の下位にあるのではなく、知性と共に人間の二つの側面を形成している要素であると記しているが(E・一三九)、ソーニャの考え方にも論理化はされていないにせよ、存在あるいは身体の重要性に対する直観的な理解があると言えるだろう。確かに人間や他の生物は存在の次元において多くの要素から成り立っており、一見、否定的な存在すらも、多くのすぐれた点や可能性を持つていてるのである。

鳥類学者ジャン・ドルストは、人間の理性重視の傾向が強い西洋哲学の流れにおいて、人間を「自然の外にあるのでも、上にあるものでもなく、すっぱり内にある」ものとしてとられたスピノザが例外的な位置を占めていることを指摘しながら(B・一一七)、現代文明における大規模な自然破壊の発生は、人間の理性重視と自然軽視の結果であり、一見合理的に見える自然の利用がむしろより大きな破綻を紹げて次のような例をあげている。
すなわち、より多くの収穫を得ようと雑草をすべて取り除き單

一作物のみを収穫しようとした所では、それまでの大地のバランスがくずれ地味が貧しくなり作物は害虫や病気に弱くなるのである(B・五五)。私達はまた、あらゆる昆虫を益虫と害虫に分け、害虫を殺虫剤によって抹殺しようとした人間の行為が「土壤の世界」を汚染し、より深刻な被害が生じている状況もつけ加えることができるだろう。

これらの例は現代に生きる私達の自然観が、理性の面から人間を「凡人」と「非凡人」に分け、非凡人には有害な人間を抹殺する権利があると考へたラスコーリニコフの自然観から、それ程離れた所には立っていないことを物語つてゐるようと思える。

ところでドストエフスキイは後期の短編『おかしな男の夢』において他の惑星に住む理想的な人々を描き、「彼らは木々と話しをしていた」と書いているが、ラスコーリニコフがソーニャを思ひながら考へた次のやうな言葉(II・二一一)——静かな目をしたやさしい人達：なぜ彼女たちは泣かないのか：なぜうめかないのか：彼女たちはすべてを捧げながら…隠やかに、静かに見つめている——は私達にそのような人々、あるいは静かな樹木の姿 자체を連想させる。

すなわち、樹木は時の流れの中で、樹木を取り巻く様々な状況——厳しい冬や環境の激変に対して何らの抗議もせずに、それらをすべて受け入れる。言葉を換えれば、樹木は現在をそのままの形ですべて受け入れ、時には現在の重さ、苛酷さのゆえに、静かに何の不平も示さずに亡んでいく。そしてこのよだな樹木の死に

ついて、私達はしばしばほとんど氣付かずに通り過ぎてしまう。

だが、よく知られているように植物は炭水化物を作り出して、人間も含め動物たちに活動のエネルギーを与え、また地球上の酸素の分子も作り出したのである。物言わぬ樹木の死はいつかは私達自身の死とつながるだろう。

そしてこの意味において、ソーニャがラスコーリニコフにたいして、彼が血を流して大地をけがしたと非難し、大地への接吻を迫るのはごく自然な行為であるだろう（II・三二二）。なぜならば樹木は大地に深く根をおろしており、大地の苦しみを感じることができると、またがされた大地の上で生物が生きることのむずかしさをよく知っているからだ。

こうして「大地を汚すな」というソーニャの言葉は素朴ではあるが、直観的な深い自然認識の上に成り立っていると言えよう。⁽¹⁾そしてラスコーリニコフはこのようなソーニャの生き方と「懲役にだってあなたと共に働く」（II・一三六）という彼女の姿勢に激しく動かされ、自首を決意するのである。

(3)

だが自首後もラスコーリニコフの自然観が一遍に変わらなくなことはなかった。彼はまだ自分のした事の内に罪を見出だすことはできず、むしろ自分が自分のした行為に耐えられなかつたことに罪を認めた。

けれどもその一方で、ラスコーリニコフの視線は執拗にソーニ

ヤの存在に注がれている。ドストエフスキイは、犯行の前日にペテルブルクの郊外をさまよったラスコーリニコフの瞳を花が惹いて「それをもつとも長くみめた」と書いているが、花から強い印象を受けつつその意味を理解できずに立ち去ったラスコーリニコフも、今度はソーニャの存在から目をそらさない。確かに彼には自分と囚人達の間には「越えることのできない深淵」があるのに対し、ソーニャがなぜ囚人達みんなから好かれるのかは、まだ「解くことのできない問題」だった（II・四一八、四一九）。だが日常的な印象の積み重ねは、いつかは大きな異和感となって彼の自然観と対立するようになるだろう。そしてそのような印象の総体として再び夢が彼を襲う。

夢の中で彼は、疫病におかされ自分が真理を知っていると思ふこんだ人々が互いに自分の真理を主張して殺し合ひを始め、ついには地球上に数名の者しか残らなかつたという光景を見る。清水氏も指摘しているように、ラスコーリニコフのこの夢は「彼自身の病根を拡大してみせ」（前掲書、一二五頁）、彼の論理の行きつく所、すなわち自己の理論に絶対的な価値を与えた場合の極北的な姿を語っていると言えるだろう。

そしてドストエフスキイは夢という表現手段を通して、ほとんど百年後の核兵器のはざまに住む我々の現状にすら迫り得ている。だがそれと共に私達は、夢において示されたドストエフスキイのこのような世界認識が単に彼の鋭い想像力によるものではなく、確かな現実認識の上に成り立っていることも注意を払いたい。

すなわち、犯行後にラスコーリニコフが居酒屋で読んだ新聞には、乱発する放火の記事と共にアンテーキという言葉がたびたび現われ、バントーラやマッサーもという名前も見られる(図・一一図)。十巻選集の註によれば、アンテーキとはペイインによつて滅ぼされたアステカ民族のことであり、バントーラやマッサーといふのは、当時アステカ民族の最後の生き残りと称して見せ物にされた二人の男女の小人の名前であることがわかる。⁽¹³⁾

このことは、この記事を取り上げたドストエフスキイの視線がどんじに向けられていたかを端的に物語つてゐるよう思える。ジャン・ドルストは生態学の立場から、現代文明のもとでは乱獲や乱伐のために多くの動植物の種が滅び、あるいは絶滅の危機にあると指摘し、これらの種が再生不可能であることを強調しているが、ドストエフスキイもまた誤まつた自然観からくる存在の軽視がどのような事態を招くかをばゝあらへ見つめていたのである。

以上、私達はラスコーリニコフの自然観の特徴とその変化を分析してみたが、このような視点から見る時、私達は次のように言つことが可能である。

すなわち、ドストエフスキイは『罪と罰』において、自然から疎外される一方、自分でも自然を低次元のものとして認識したラスコーリニコフの思想と行動を通して、知に対しても優越的な地位を与え、感情や身体をその下に位置づけた近代西欧思想との自然観に対して根本的な反省をしてくる。

小説の結末近くでドストエフスキイは、ソーニヤに対するラス

コーリニコフの想いを書きとめている。

「今となつては、彼女の信念は俺の信念になれないのか。少くとも、彼女の感情、彼女の意欲ぐらは……」(傍点筆者)。

註

- (1) ドストの本は次の記載や略し、頁数を略号の下に示す。
〔1〕、「Преступление и наказание」、略号(П.)、Ф. М. Достоевский, Полное собрание сочинений в 30 томах. Т. 6, Ленинград, Наука, 1973.
〔2〕、「Гюль-бек」、監訳(ハ)、ベシム・ホ、上藤喜作、斎藤博訳、中央公論社、一九六九年。
〔3〕、「方法序説」、略号(М.)、デカルト、野田又夫訳『世界の名著117』、中央公論社、昭和五三年。
〔4〕、「情念論」、略号(Д.), ド・カルト、野田又夫訳『世界の名著117』。
- (2) 〔1〕、「文明の生命力 テクノロジーがハニロジーへ」、略号(М.)、ジャン・ドルスト、宮原信訳、TBSPリタニア、一九八一年。
- (3) 〔1〕 なおМ. ベーチンは「ドストエフスキイによればドストエフスキイは理解するだけではなく『感歎する』ことしかできない」と述べている。M. M. Бахтин, Проблемы поэтики Достоевского, Москва, Советский писатель, 1963, стр. 113. 新谷敬三郎訳『ドストエフスキイ論』、新潮社、昭和四九年、一一五頁。
- (2) ルバート・ハバキイーが兄と共に出版していた雑誌『Время』

(註) じばスユーハーボトの論述より「海の國からベジハチの
新説」から翻訳された。В. С. Неструев, Журнал
М. М. и Ф. М. Достоевских «Время», 1861-1863, Москва,
Наука, 1972, стр. 178.

カナルベーナー博士の戯謔小説『未成年』の草稿で
アランベーナーの名前をあざしておつ、注解者は「ねばんバ
ルヒスキーがベジハチにひじて深く考へんだ」といふ物語
であるたゞ論じて。Литературное наследство, Т. 77,
Москва, Наука, 1965, стр. 287, 289, 292, 294, 312-314,
496-498.

なお、キルボーチンは「ベーナー博士」が『聯説』の登場
人物は「海の國然は、すべて一つのものであつ」からベジ
ハチの言葉を語らせてくると述べているが、『未成年』にお
ける、ある感情の入りこみのない人間を正常に戻すには「そ
の感情そのものを変えねばならないが、それには何程度に強
烈な別な感情を代りに注入する以外に手はない」という登場
人物の言葉が、ベジハチの「感情は、それと反対の、しかも
その感情よりもっと強力な感情によひなければ抑えねといふ
除去するといひやきない」(エ・リヒト) ところ定理を想起
させるやう。わろん早急な結論はひかえねばならないが、感
情論の地平から見る時、ベジハチとリストエフスキイという
全く異なったタイプの思想家の間には共通した考え方が少から
ずあるようと思える。

(3) 椎藤博、『ベジハチスマイの思想』、創文社、一九七四年、
1111頁。

(4) В 30 томах, Т. 7, стр. 136.

(5) 加賀江彦氏は「ベジハーリーハトの児の夢が、彼のおかれ
ている「状況不可分である」」などと社説して、夢を「のよ
うと用ひだしたベーナー博士の先見性を指摘している。『シ
ベーナースキイ』、中央公論社昭和四八年、一六五頁。

また渡辺好明氏は論文「シベーナースキイとアイダホテ
ィティ」において、夢の働きを分析している。『シベーナー
スキイ研究』、海燕書房、一九八四年、四一一五六頁。

(6) ベーグル、『小説理論学(上)』、松村一人訳、岩波書店、一九
五一年、一〇五頁。

(7)

〔「『聯説者』“シンドтель”といふ用語はハベニコリト由
來じよべて用ひゆふ」と（二・一五〇）〕。

(8) ベーローハキイ、ハーリック編『シベーナースキイと現
世』、大手義治訳、トピカ出版社、一九八〇年。

(9) Записки из Мертвого дома. В 30 томах, Т. 4, стр. 34.

Подросток, В 30 томах, Т. 13, стр. 285.

(10) В 30 томах, Т. 25, стр. 113.

(11) 井桁貞義氏は論文「大地—聖母—ソーフィア」によると、ロ
シアの民間信仰について述べ「ソーフィアと大地の関係と言及し
ては」。『シベーナースキイ研究』、三三一四〇頁。

(12) 椎谷氏は、この表現に注目「じつに素氣のない文章」だ
が、同時に激しく「人の注意を吸い寄せる文章」だと指摘し
てはいる。前掲書、一一一頁。

(13) Ф. М. Достоевский, Собрание сочинений в 10 томах,
т. 5, Москва, Гослитиздат, 1957, стр. 593.